

平藤喜久子) 事業とも協力しながらプロジェクトを進めていく。

二、デジタル・ミュージアムの運営
かねてより、「デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ」を組織してシステム全体の円滑な運営を図ってきたが、本年度については、新システムへの移行に合わせ、最適な運営の仕方についても検討していくことになる。運用上の課題点を共有して改善を図ることや、利用者の利便性を高めていくことなどは、引き続き行っていく。デジタル・ミュージアムのアクセス数(二〇二〇年は年間で延べ七〇三、六九八件であった)について定期的に共有・分析し、海外からの利用状況についても把握しながら、利用状況の改善を試みる。またデータベースの新規追加も随時受け付ける。

三、デジタル・ミュージアムの展開のための独自のコンテンツの構築
①神道と日本の宗教文化に関するポータルサイトと独自コンテンツの拡充

現在、デジタル・ミュージアム上において、日本文化研究所の研究成果としていくつかの英語のデータベースを構築し、公開している。主要なものとしては、まず前述のEOSがあり、EOSに附属する形で初学者用の神道入門ウェブサイト「Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide 図説による神道入門」や「Chronological Supplement 年表」を公開している。他に双方向論文翻訳データベースや、神道基本用語集などを公開している。また、旧日本文化研究所時代に作成した日本の宗教文化に関する英語論文などもウェブ上で公開している(例えば

Contemporary Papers on Japanese Religion (シリーズ「マツリ」)『Matsuri: Festival and Rite in Japanese Life』『New Religions' Folk Belief in Modern Japan』『Kami』の四集が公開されている)。Shinto Portal サイトはこれら既存のコンテンツに対して、一覧性を備えたナビゲーションを提供するものである。使い勝手を向上させながら、神道と日本の宗教文化を学ぶ際に有用なウェブコンテンツについての情報を収集してリンクを拡充し、国内外の学生が神道を学ぶ際に活用できるものとすることを目指す。また、本事業において宗教文化教育のために作成した教材についても、ポータルサイトとリンクさせる。

また、昨年度に実施して報告書を刊行した第13回学生宗教意識調査について、結果を検討して考察を加え、教材としても活用できるように形で、分析編として公開する予定である。更に、引き続き神祭具データベースについても設計・公開していく。

②過去の研究資産の整理・公開

昨年度に運用を開始した日本文化研究所のウェブサイトにおいて、日本文化研究所の過去の研究成果をデジタル化して公開していく。二〇一七年度に研究開発推進機構は発足十周年を迎えたが、それ以前の旧日本文化研究所の五〇年間を合わせ、遡って情報を集約して整理し、過去の催事や刊行物の一元的なリスト、年表などを作成する。これに合わせて、過去の催事の写真や動画なども集約し、アクセスしやすいような形で整理していく。

③研究成果の国際的発信

本学の研究成果を国際的に発信することを目的として平成三十一年度

に創刊した英文のオンラインジャーナル『Kokugakuin Japan Studies』を引き続き編集・発行する。本年度刊行予定の第三号についても、國學院大学の専任教員による日本文化研究に関する論文の英訳を掲載する。本学から刊行されている学術雑誌のなかから、日本文化研究に関するものを三本程度選定し、これらを英語に翻訳し、編集してオンラインで公開する。

四、宗教文化教育の教材研究の国際的展開

①宗教文化教育の教材研究・作成

研究成果の教育への還元ということを念頭に置きながら、「宗教文化教育推進センター」と協力して、宗教文化教育の教授法を研究して有益な情報を共有し、また教材開発を行って、作成していく。現在、「世界遺産と宗教文化」「映画と宗教文化」「博物館と宗教文化」といったデータベースを公開しているが、それらの拡充を図ると共に、新たなデータベースの追加について議論し、設計・公開していく。また、地図上に情報を表示させる形でのデータベースについては、以前からスマートフォンアプリ「ロケスマ」上での公開を行っており、これについても更なる拡充を検討する。

②神道と日本の宗教文化に関する教材の研究と作成

科学研究費基盤研究(B)「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」事業と連携して、特に神道関連で必要とされる教材について、海外の日本宗教関係の授業におけるニーズ調査を踏まえて開発していく。昨年度、同科研究成果として英語字幕付きの神社紹介動画を作成して公開したが

(<https://www.youtube.com/channel/UC6GAp4N854wMb9Z4Rj-C8w>)。本年度も引き続き拡充していく。また、そのための研究会についても、状況に合わせて実施していく。

③教材動画のシステム構築

以前より日本文化研究所では、現地調査の際に動画を撮影したり、あるいは主催した催事の記録動画を作成したりしてきており、これらを整理しながらデータベース化を進めている。また、EOSにも百件を超す動画が含まれている。これらの動画資産と、新たに作成する教材用の動画などを合わせて、国内外から広く利用してもらえようとするためのシステムを引き続き検討している。

五、日本文化研究所国際研究フォーラムと研究会について

日本文化研究所は、研究所全体の催事として、毎年国際研究フォーラムを開催しており、昨年度は「見えないものたちと日本人」というタイトルの下にワークショップ二回と講演会一回を合わせた一連の企画を行った。本年度中にこの報告書を刊行することを予定している。

本年度の交際研究フォーラムについて、引き続き視覚文化の面から日本の宗教文化を考えることとし、特に実際に撮影・録画・記録し、またこれを発信して伝えていくという局面に焦点を合わせたシンポジウムを年末に開催することを計画している。

また、本年度よりオンライン研究会を定期的に開催する予定である。研究成果の社会還元の一環でもあり、広く参加を受け付ける形で行っていく。

(文責・星野靖二)

日本文化研究所 令和三年度事業計画② 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の 成果公開とデータベース再構築

一、事業の目的と概要

本事業は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち「神道・国学研究部門」の研究事業として行われるものであり、平成三十九年度より三期間にわたって実施された「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築」を踏まえつつ、これまで日本文化研究所において蓄積された研究成果の発信を主たる目的とする単年度の事業である。

また昨年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、年度中に実施する予定であった計画について、中止あるいは延期せざるをえなかったものも多い。そのため本事業では延期となった昨年度予定していた事業の実施等も併せて行う予定である。

さて、令和三年度の事業内容は、以下の三つの目標によって構成されている。

- (1) 近世・近代国学史像の再構築と発信
- (2) 国学・神道関係人物データベースの拡充
- (3) 国学研究のネットワークの拡張

これらの目標を達成するために以下①から⑨の計画を推進する。

- ① 上記国学史像を発信するため

② 国学入門書の編集・刊行
③ 本学及び旧日本文化研究所蔵の国学・神道関係資料の現存状況の調査・整理

④ 近世中期～明治初期の国学・神道関係人物に関する基礎的データの収集

⑤ 國學院大學デジタル・ミュージアム上の「明治期国学・神道・宗教関係人物データベース」の管理・運営及びデータベースの増補

⑥ 本プロジェクトにおいて作成してきた学術資産の再構築とデータベース化

⑦ 定例の国学研究会・社家文書研究会の運営

⑧ 学内外の講師を招き、国学研究の最新状況に関する公開レクチャーの開催

⑨ 日英両言語による双方向型ウェブサイト「国学・神道・日本宗教フォーラム」の運営

⑩ 日本文化研究所によるこれまでの神道・国学研究のアーカイブ化とウェブ発信

⑪ 概括すれば、近年の研究を踏まえた最新の国学史像を提示する入門書を刊行するとともに、学内を中心とする国学・神道関係の資料調査・整理を行い、データベースを拡充して、定例研究会・公開レクチャーの開催及びSNSコンテンツを通じた成果

を広く発信し、国学研究プラットフォームとしての意義を拡充することが本研究事業の目的である。

二、具体的な事業計画

次いで、より具体的な事業計画について説明する。

既に①については、出版社とも調整の上、目次を作成し、各執筆者からある程度原稿を提出いただいている。特に本年度においては、原稿の調整や巻末附録等の作成を主として行う。

②については、昨年度中から研究開発推進機構に寄贈された「今泉定助先生関係資料」の保存を目的として整理を行っており、本年度も整理を継続する。また、平成十九年に國學院大學図書館に寄贈された明治期の国学者井上頼国と、その子・孫である頼文及び頼寿の井上家三代の膨大な資料群である「井上氏旧蔵資料」の整理も行う。なお、「井上氏旧蔵資料」については、一部整理はされていたものの、特に井上頼国宛の書翰を中心に調査・整理を行う予定である。

③については、④とも関係するが、これまで國學院大學デジタルミュージアムで公開してきた「明治期国学・神道・宗教関係人物データベース」の情報も拡充するために、特に研究文献の調査等を行い、データベースに反映させていく。

⑤については、研究開発推進機構内に日本文化研究所が再編成されて以来、展開してきた各種の神道・国学関係プロジェクト、即ち、平成十九年度の「近世国学の靈魂観をめぐ

る思想と行動の研究」以来、平成二十年から二十二年までの「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究―靈祭・靈社・神葬祭―」、平成二十三年から二十五年の「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築、「平成二十六年度の「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」、平成二十七年から二十九年度の「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開―明治期の国学・神道関係人物を中心に―」、平成三十年から令和二年度の「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築」に至るまで蓄積された研究成果の公開を目的とするものである。そのため、これまでの研究成果を再検討し、データベース化するなどして公開方法等を模索していく。

⑥及び⑦については定例の研究会を開催し、学内外の若手研究者を中心に発表をいただくことで、最新の国学研究の成果を共有、あるいは学術交流する場として運営する。また公開レクチャーについては、現状対面での開催に向けて、調整を行っているが、状況次第ではオンライン会議システム等を用いた遠隔での開催も視野に入れる。

⑧と⑨については、ウェブを中心に成果・情報の発信をする。これにより国学研究のプラットフォーム拡充を目指す。

(文責・武田幸也)

学術資料センター 令和三年度事業計画① 博物館収蔵品の資料化とデジタル公開に関する研究

一・事業の目的

館祖である樋口清之が昭和三(一九二八)年に考古学標本室を設置して以来、考古学資料室・考古学資料館・学術資料館時代を経て、國學院大學博物館が収集してきた考古資料・民俗資料は、約十万点に及び、台帳の登録件数も六〇〇〇件を超えている。また、当館では、これらの有形文化財はもとより、かつて本学に関係した研究者たちが遺したアーカイブ類に加え、新たに浮世絵等の絵画資料なども収集・研究対象として取り扱うようになってきた。

本事業は、このような國學院大學博物館所蔵資料の調査研究を基盤とする大学ミュージアム活動の中核であり、旧考古学資料館より継続している考古・民俗資料研究、旧日本文化研究所「学術フロンティア事業」以来の資料デジタル化研究、旧伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクトを引き継ぐ祭祀考古学研究、同「國學院の学術資産に見るモノと心」の一部を引き継ぐ歴史資料研究を網羅するものである。令和元(二〇一九)年度まで、三次元資料と二次元資料を取り扱う二部門を立てていたが、同じ博物館資料を横断的に活用することを眼目として、昨年度から一元化し、総合的な研究プロジェクトに衣替えることとした。

二・事業の概要

本事業では、次の項目に掲げたとおり、國學院大學博物館が所蔵する文化財の整理・研究・活用を目的とした事業を展開する。

①資料収集・整理保管

収蔵品の不足を補う中長期的な資料収集・修理計画を策定・推進する。また、台帳の増補と、特定資料目録の作成(古鏡・埴輪・古瓦・板碑・陶磁器・民具・歴史資料など)を進め、資料保存・管理システムの構築、改善を図り、保存環境整備と重要資料の修理・演具製作などを行う。

②資料研究

学史的な重要資料をはじめとする収蔵品の再整理と、纏まった資料群の調査研究を推進し、学術情報を逐次記録してデジタル化を推進する。さらに収蔵品の科学的調査・分析等を実施することによって「重要考古資料調査報告」の刊行に備える。

③テーマ研究

当館による独自の研究や、館蔵資料の学術的な再評価を図るため、必要な野外調査を伴う調査研究を実施する。加えて、祭祀考古学会と連携した祭祀遺跡データベースの構築(当面は科研「出ユーラシアの統合的人類史学」との連携で推進)と、博物館創立百周年を目指した館史の編纂に取り組む。

④教育普及

デジタル画像を伴う特定資料目録を作成し、WEB上の國學院大學デジタルミュージアムで公開する。また、これまで刊行してきた『中世和鏡の基礎的研究』シリーズに加え、『漢代物質文化資料図説(邦訳)』など、館蔵文化財に関する書籍を編集。研究成果全般については、博物館における展示活動・イベント等による公開を行う。

⑤学芸職員実践教育

学部・大学院と連携し、博物館業務を担う研究員・臨時雇員に学生等を任用し、実践業務に当たらせることで、アカデミックキャリアの形成に資したい。具体的な業務を実践することで考古・民俗・歴史学の専攻生を育成し、専門職へのキャリアデザインを提供する。また、学部・大学院の考古学実習成果の公開や、山梨県埋文センターの協力による発掘研修、帝京大学文化財研究所等の協力による文化財分析の実践なども推進する。

三・本年度の事業計画

①⑤に示した事業は、全期間を通じて実施し、順次成果を公開してゆく。

その内、①事業で特に重点的に取り扱うものとして、先史資料(昨年度実施した縄文土器に加えて土偶・石棒など)、原史資料(祭祀遺物・埴輪・古鏡など)、有史資料(昨年度実施した和鏡・柄鏡に加えて古瓦・陶磁器・石製塔婆など)、外国資料(鞍山中学校旧蔵資料)、民俗資料、歴史資料(社寺等絵巻書資料など)、研究者個人資料(斎藤ミチ子資料など)があげられる。

②としては、弥生文化の発祥にま

つわる長崎県山の寺遺跡出土遺物の再整理と、重要美術品に指定されている埼玉県野原古墳群出土人物埴輪武装男子の解体修理・資料化を推進する。

③としては、「神社」の成立過程を明らかにする神社境内祭祀遺跡の研究として、関係する重要館蔵資料(洗田遺跡・建鉾山遺跡出土資料ほか)の資料化と併せ、兵庫県保久良神社の調査を計画している。同神社については、当館創立者の樋口清之が最初に神道考古学的調査を実施した経緯がある。具体的な調査の実施に関しては、神戸市教育委員会の須藤宏学芸員にご協力を頂き、境内遺跡出土資料の調査を行う予定である。また、長く本学がフィールドとしてきた伊豆半島・伊豆諸島の信仰史を跡付ける「伊豆地域の宗教考古学的研究」調査として古代・中世三島信仰の中核をなした三宅島における富賀神社・御笏神社・薬師堂など、主要な社寺の文化財調査を予定している。しかしながら、これらの学外調査については、昨年度同様コロナ禍の動向を見極めながら実施する。

④としては、吉田恵二資料『漢代物質文化資料図説(訳稿)』について、原著者の中国国家博物館研究館員である孫機氏と、中国社会科学院考古研究所副所長の朱岩石氏よりご協力を得て、令和四年度の刊行を計画している。成果公開事業としては、博物館企画展示として「アイヌ展」を予定している。また、①事業で得られた成果は、順次デジタルミュージアムで公開する。

(文責・深澤太郎)

学術資料センター 令和三年度事業計画② 神道関連資料の整理分析と神道史の再検討

一、事業目的・概要

令和二年度より、学術資料センター(神道資料館部門)(以下、本部門)では、「神道関連資料の整理分析と神道史の再検討」(令和二年度～四年度)を進めている。同研究事業は、本部門が所管する資料の整理や、本部門がこれまでに行ってきた研究事業で得られた成果などを活用し、それらを祭祀・祭礼・神社を中心とする神道史の中に位置づけることを目的とする。

ここで得られた成果は、本部門の刊行物、國學院大學博物館での展示、同博物館のYouTube・Twitter・Facebookなどの発信を通して、本学の学生及び社会に還元する。

このように、本研究事業は、國學院大學博物館の事業と密接に結びついており、協働して行うことも多い。

二、前年度の成果

①刊行物

令和二年度は、「古代の祭りといー疫病・災害・祟り」を刊行した(國學院大學博物館にて販売)。神道や祭祀の歴史を振り返ると、日本列島に暮らした人々は、くり返し起こる疫病や様々な災いに対して、神を祀ることで対応しようとしてきた。現在の新型コロナウイルス感染症の流行は、過去の記録に残る「疫

病の流行」がどのようなものであったのかを、我々に実感させている。このような中で、神道や祭祀の歴史から日本人と疫病・災害との関わりを考えたのが、本書である。

同書には、

- ・岡田莊司「祭祀の本源」
- ・加瀬直弥「古代祝詞に見る災害対処法」
- ・木村大樹「『延喜式』にみる祭祀と穢れ・祟り」
- ・笹生衛「平安時代の災害と新たな神まつりー文献史料と気候変動データからみた祭祀の成立ー」
- ・吉永博彰「天神信仰ー古代から中世への神観念・信仰の転換ー」
- ・松本昌子「祇園祭と八坂神社」
- ・水谷類・吉永博彰「『年中行事絵巻』(岡田本) 絵解き」

②展示・行事

令和二年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、展示・行事はオンラインにも力を注いだ。

- ・國學院大學博物館では、國學院大學博物館 Online Museumを開始し、本部門の研究成果も、
- ・笹生衛「常設展「神道 Part1」神祭りの原像」(令和二年七月公開)
- ・大東敬明「常設展「神道 Part2」神々の姿」(同八月公開)

・吉永博彰「常設展「神道 Part3」神々への捧げ物」(同九月公開)を通して公開している。この動画は、本学・神道文化学部の授業でも活用されている。

また、令和二年度國學院大學文化講演会(國學院大學エクステンションセンター主催)も、オンラインでの開催となった。同年度の講演は、岡田莊司名誉教授による「古代の祭り」と疫病・災害」であり、この動画制作に本部門も協力している。

なお、本部門が所管する宮地直一旧蔵資料のうち、「羽田野神主家文書」については、日本文化研究所「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築」において整理分析が行われ、その成果は國學院大學博物館神道展示室に於いて「江戸時代の神主家文書」(令和三年二月)として公開された。

③その他

このほか、本部門では、宮地直一旧蔵資料(洋装本の部)、西田長男旧蔵資料の調査・整理を行った。

三、令和三年度の事業計画

まず、國學院大學博物館で行っている特別列品「神の新たな物語ー熊野と八幡の縁起ー」(会期・令和三年五月十三日～七月三日)は、昨年度、緊急事態宣言の影響により二週間ほど(会期・令和二年三月二十日～四月七日)で閉幕したものを、改めて開催したものである。詳細は、「研究開発推進機構ニュース」二七号(令和二年六月)に掲載した昨年

度の事業計画で触れたが、今年度は「かみよ物語」(國學院大學図書館所蔵)ほかを加え、図録を刊行するなどとした。同展示にも本部門は主体的に関与している。

企画展「ホワッツ神道ー神道入門ー」(会期・令和三年七月七日～九月十一日(予定))は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 Ernie Rambaie 研究室、本学神道文化学部、同日本文化研究所、科学研究費基盤研究(B)「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」(代表・平藤喜久子)とともに、その計画に加わっている。同展示は、神道を英語と日本語で紹介するものであり、本部門は本学の学術資産を活用した展示案の策定や、ガイドブックの作成協力などの役割を担っている。

また、本事業の成果として、今年度は本学の学術資産を活用した神道史の図録を作成する予定である。同図録は、國學院大學博物館神道展示室あるいは本学の学術資産を活用した授業などで用いること(教育目的)を前提としたものである。

昨年度より、神道・神社・祭祀研究の基礎として、新たに「延喜式」祭祀関連条文の概要の整理を始めた。この整理は、今年度も継続し、國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」で作成した、「神道・神社史料集成(神社資料データベース)」と関連付けることを目指す。

(文責・大東敬明)

校史・学術資産研究センター 令和三年度事業計画① 國學院大學における自校史研究とアーカイヴの活用

一、事業目的

校史・学術資産研究センターは、國學院大學の歴史及び本学の有する学術資産の研究を行い、その成果を広く社会に還元することを目的として設置された。本センターの校史研究部門では、校史に関する研究、資料の収集、整理及び展示、研究成果の公開及び本学の教育活動への支援などを通じて、自校史に関する学術研究を行う。

また、平成二十九年に策定された「國學院大學二十一世紀研究教育計画(第四次)」に示された「校史および貴重史料の整備と、それを活用した調査・研究・教育の推進」を具現化することを目的として、國學院大學の歴史の研究を行い、その成果を広く社会に還元することを目的としている。

校史研究部門では、「國學院大學における自校史研究とアーカイヴの活用」事業(令和二年度～四年度)を推進し、校史資料の整理・調査・研究を通して、本学創立一四〇周年・一五〇周年の年史編纂に向けたアーカイヴ整備を行う。本研究事業は、事業期間全体を通して、先行事業により作成した「校史資料簡易目録」の更なる充実を図るとともに、年史編纂を視野に入れつつ、目録を

活用した資料調査を進めることを基軸とするものである。

二、前年度の事業成果

前年度は、新型コロナウイルス感染症のため、一時的に在宅勤務を余儀なくされたが、概ね当初の事業計画を推進することができた。

校史研究部門では、在宅勤務時に、デジタル化済みの校史資料の翻刻や調査を行った。また、在宅勤務解除後は、「校史資料簡易目録」に基づき、資料の整理を行うとともに「國學院大學八十五年史」、ならびに「國學院大學八十五年史 史料篇」、「國學院大學百年史」上・下巻に活用された資料の調査、および「國學院大學百年史」以後の資料の選定・調査を行った。

また、校史資料のデジタル化については、写真一三七九点、オープンリール四本のデジタル化を行った。

新型コロナウイルス感染症にともなう対応の一つとして、國學院大學博物館で進めている「Online Museum」において、校史あるいは本法人所蔵資料についての動画を作成した。同動画では、本研究事業担当教員が解説を行い、本事業の成果を多くの人々に還元している。これらは、今後、本学の校史に関わる授業

での活用が期待されている。

一方で、予定していた「神道と文化」で用いるサブテキスト「國學院大學の歴史」の冊子による配布については、同授業の対面での開催が見通せないことから、保留としている。

成果としては、「校史・学術資産研究」第二三号(令和三年二月)、「校史」第三一号(令和三年二月)などに掲載した。そのほか、「國學院大學学報」に連載記事として「学問ノ道」第二五～三二回(「國學院大學メディア」)、本学HPにも転載)として、校史ゆかりの人物記事を掲載した。

三、本年度の事業計画

令和二年度の校史資料の整理を継続するとともに、戦後資料を中心に校史資料の調査・研究を行う予定である。そして、これらと並行して戦後の年譜作成を行う予定である。具体的には「校史資料簡易目録」登録の資料のほか、「國學院大學概要」や「学報」などを用いて、未だ詳細に把握できていない本学の戦後史を閲覧できる年譜を作成する。

これらの整理・調査・研究を通して「國學院大學百年史」以後の本学の歴史を、校史資料を通して体系的に把握することが可能となると考えられる。あわせて、音声テープや写真などの劣化しやすい資料をはじめとした校史資料の早期のデジタル化を行うことで、校史資料の長期保存・公開・閲覧等、今後の年史編纂

や自校史の研究に向けたアーカイヴの体制整備を行っていく。

デジタル化については、これまでデジタル化してきた過去の刊行物や写真、音声テープなどのデジタル化のみならず、本学が持つ固有の価値を評価する上で重要と考えられる「原資料」を随時デジタル化し、校史のデジタルアーカイヴとして公開できるように準備を進めてゆく。

また、寄贈資料や学内外からの問い合わせ対応しつつ、本センターのレファレンス機能の更なる充実を目指す。

本事業での研究成果は、「國學院大學 校史・学術資産研究」や「校史」といった本センターの機関誌等で発表する。また、研究成果の教育や社会への還元を目的に、既存の全学科対象科目「神道と文化」サブテキストを増補改訂した「國學院大學の歴史」を刊行する予定である。

加えて、本事業において進捗した校史資料の整理・研究をふまえて、本学博物館における常設展示の展示替えを行うことで、研究成果の一部を一般に公開する。

(文責・渡邊 卓)

校史



『校史』 Vol.31

『校史』 Vol.31

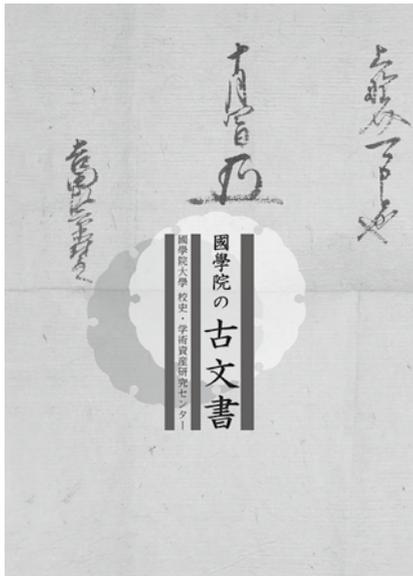
校史・学術資産研究センター 令和三年度事業計画② 國學院大學における学術資産研究の体制整備

一、事業目的

校史・学術資産研究センターの学術資産研究部門では、昨年度まで展開してきた「國學院大學における学術資産研究の可視化」事業(平成三十年度・令和二年度)を継承しつつ、新たに「國學院大學における学術資産研究の体制整備」事業を推進する。

本事業は、単年度計画であるが本学図書館所蔵の貴重書および特殊コレクションに収められた資料を再調査し、本学図書館所蔵の学術資産の全体像を把握するとともに、「学内研究者向けデータベース」を新たに構築し、本学の研究者における本学学術資産の活用とその研究成果による教育への還元のための基盤整備を行うものである。

本事業は、本センターの校史研究



『國學院の古文書』

の事業も、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、資料閲覧などが出来ず、当初の計画通りには進まなかったが、これまでの調査を基礎として、翻刻作業やデータ整理を行った。また、これまで解題を執筆してきた國學院大學図書館デジタルライブラリーの全

部門と同様に、平成二十九年に策定された「國學院大學二十一世紀研究教育計画(第四次)」に示されている「校史および貴重史資料の整備」と、それを活用した調査・研究・教育の推進、「学術資産の活用」を具現化することを目的として、本学所蔵の学術資産の活用を推進するための体制を整備する。そして、國學院大學が有する学術資産の研究を行うことを推進していく。

二、前年度の事業成果

前年度まで展開してきた事業においては、國學院大學図書館と連携しつつ、本学の学術資産研究の成果を、國學院大學博物館における展示や図書館デジタルライブラリーへの「掲載」を通じて「可視化」することを目指してきた。こ

体像の把握などにつとめた。

この成果として、「國學院大學の古文書」(令和三年三月)を刊行した。これは本学図書館所蔵の「久我家文書」「吉田家文書」「藤波家文書」等から二一点を選び、翻刻・解題を付したものである。さらに、古文書を見るための基本的な解説も掲載しており、教材としての活用も視野に入れた刊行物である。

なお、新型コロナウイルス感染症の影響としては、本センターが研究成果の発信のため例年開催していた本学博物館と連携した展示は開催できなかった。

この他の成果としては、「校史・学術資産研究」第一三三号(令和三年二月)、「校史」第三二二号(令和三年二月)などに掲載したほか、「國學院大學学報」連載記事「未来につながる学術資産研究ノート」(國學院大學メディア)、本学HPにも転載)として、学術資産に関する記事を掲載した。

三、本年度の事業計画

これまで、本学図書館を中心に、本学が所蔵する学術資産の調査・研究を、本センター学術資産研究部門では継続して展開してきた。それによって得られた知見などを、今後、どのように学内において共有するか、学術資産の活用を活性化させるかが課題であるといえる。

そこで、本年度からの事業においては本学図書館刊行の「國學院大學図書館所蔵貴重書目録」や特殊コレクションの目録、本センター刊行の「國學院大學図書館所蔵 中近世文書

書籍目録」「國學院大學所蔵古典籍解題・中世散文文学篇」等を悉皆調査し、書誌情報の修正を行うとともに、学内研究者向けデータベース構築に向けた学術資産のデジタル化の基盤整備を行う。既存の目録には掲載資料の重複も確認されており、本データベースを構築することによって、本学が所蔵する学術資産の情報を一本化し、かつ学内において容易に共有することができる体制を整備する。

目録の悉皆調査後には、データベースの構築を目的とした書誌情報などのテキストデータ化を行う。そして、本事業の中核となる「学内研究者向け学術資産データベース」の構築については、本学の学術資産の活用を資する共通基盤データベースとするために、本機構学術資料センター等との協働により検討していく予定である。

また従来通り、本学図書館デジタルライブラリーと連携し、本学学術資産のデジタル公開の拡充を行い、デジタルライブラリーの補填・修正によって、本学の学術資産の社会還元を行っていく。

本事業で構築するデータベースには、本学所蔵学術資産を活用した近世国学における研究成果や本学における研究成果に関する情報を盛り込むことで、「国学」以来の歴史観の上に立脚した学術資産研究をも推進することにつながると考える。

(文責・渡邊 卓)

研究開発推進センター 令和三年度事業計画①②④
研究開発推進センター研究事業
國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業
「渋谷の歴史・民俗・宗教に関する研究」
「地域マネジメント研究センター」設置準備事業

一、研究開発推進センター研究事業

本事業は、「建学の精神」に基づく国学的研究方法によって、幅広く日本文化の研究をさらに発展させることを目的とする単年度事業である。なお本事業は、院友神職会をはじめとする神社界からの指定寄附金等の外部資金を基に実施される。

本年度は、「(一) 幕末維新期の神道・国学に関する研究」、「(二) 神道・日本文化に関する学内資料の調査・研究」、「(三) 伝統文化・神社・地域と共存社会の研究」、「(四) 乃木神社の研究」、「(五) 神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化」、「(六) 研究開発推進センター研究会」、「(七) 國學院大學研究開発推進センター研究紀要」の刊行」の各事業を実施する計画である。

昨年度から開始した、「(一) 幕末維新期の神道・国学に関する研究」については、諸資料(制度・思想・人物等)を多角的・実証的に検討することを目的に、資料調査を進めるとともに、関連年表及び文献目録の作成を実施する。研究成果については、『研究開発推進センター研究紀要』第十六号等に公開する予定である。「(二) 神道・日本文化に関する学内資料の調査・研究」については、

本学所蔵の神道・日本文化に関する資料について、本機構の本学共同利用研究機関と連携しつつ、調査・研究を行うことを目的とする事業である。

平成三十年から実施している「(三) 伝統文化・神社・地域と共存社会の研究」については、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」における共存学グループの研究事業を継承し、建学の精神に基づく「共存社会の構築」、「持続可能な社会の構築」に資する研究の推進を目的としている。本年度は、令和二年度共存学公開研究会「東日本大震災被災地の復興活動十年を振り返る」の研究会記録を作成するとともに、「シチズンシップ科目(共存・共生の思想)」、共存学研究会、資料調査等を実施する。

令和五年に創建百年を迎える乃木神社からの依頼に基づく、「(四) 乃木神社の研究」については、令和元年度から本年度までの三年間の研究事業を実施した成果として、令和四年には『乃木神社御鎮座之記(仮)』を刊行する予定である。本年度は、これまでの資料調査に基づき、原稿執筆・年表作成、編集作業等を進めていく。

「(五) 神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化」については、明治神宮国際神道文化研究所、神道文化会など、関係の深い研究機関、組織と連携する研究交流企画の立案・実行を目的としている。本年度は、コロナ禍の状況を注視しつつ、シンポジウム・講演会の開催等を検討していく。

これらの研究事業について、「研究開発推進センター研究会」を随時開催するとともに、本事業の成果として、『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第十六号を編集・刊行する予定である。

二、渋谷の歴史・民俗・宗教に関する研究

本事業は、平成三十年から、令和二年度まで実施した、「渋谷の都市形成と再開発に関する研究」を基に、渋谷の歴史と現状、再開発等も見据えながら、渋谷の歴史・民俗・宗教を中心として研究を進める単年度事業である。特に昨年度、コロナ禍の影響によって延期した部分を実施する事業計画としている。

昨年度(令和二年度)は、渋谷の都市形成過程を検討する基礎資料として、渋谷歴史年表明治編、渋谷関連文献目録の作成を行い、成果刊行物にて公開したが、本年度は、続編として、渋谷歴史年表大正時代編を作成・公開する予定である。

また、昨年度コロナ禍の影響で中止とした渋谷学シンポジウム「東京渋谷を科学する」をオンラインにて実施し、基調講演、渋谷の歴史・民

俗・宗教に関する三人の研究報告、コメント等を交え、渋谷研究の今後について議論することを予定している。

また、本事業の成果として、『ブックレット渋谷学03』を刊行するべく編集作業を進めていく。現状、令和二年度に実施したオンライン渋谷学シンポジウム「地域資源を活かした都市防災へー渋谷東地区と他地域から考えるー」の研究記録、渋谷歴史年表等を掲載する予定である。

その他、令和二年度採択・科学研究費基盤研究(B)「戦前期東京における住宅開発と生活空間の変容ー東京府渋谷区を事例にー」(研究代表者・根岸茂夫、課題番号20H01315)、平成三十年から進めている「松濤研究会」等とも連携しながら、資料調査、研究会を実施していく。

三、「地域マネジメント研究センター」設置準備事業

本事業は、令和四年四月設置に向けて認可を申請している観光学部(仮称)の付置センターとして開設予定の「地域マネジメント研究センター(CMI (Community Management Institute))」の体制整備に関する単年度事業である。想定しているCMIの役割・機能は、①研究推進・支援機能、②地域連携機能、③企画運営機能の三つであり、本事業においては、その円滑な立ち上げを図るため、令和三年度を準備期間と位置づけ、各種事業を実施していく予定である。(文責・宮本誉士)

研究開発推進センター 令和三年度事業計画③
 國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業
 「神道と日本文化の創造的「古典学」」
 —令和の新しい国学研究—基盤整備事業—

一、事業構想の前提

平成二十八年度、文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」(タイプB:世界展開型)に、國學院大學の「古事記学」の推進拠点形成—世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的研究・教育・発信—が選定され、古事記学センター及び研究開発推進センターが中心となつて研究事業を推進してきた。この「古事記学」事業は、國學院大學で継続されてきた神道と日本文化の国学的研究の根幹にある『古事記』を、学際的・国際的観点から再検討し、その成果を国内外へ広く発信することを目的としていた。そして、日本の歴史と伝統文化および自国と異文化との多様性を考察する拠点の形成やグローバル社会に寄与しうる人材を育成することで、國學院大學の建学の精神の具現化を目指す事業であった。そして、「古事記学」事業は昨年度をもって五年間の研究計画を完遂し、終止符を打った。

なお、令和二年度の「古事記学」事業は、新型コロナウイルス感染症の拡大もあり、事業計画を大幅に見直さざるをえない点もあったが、左のような研究事業が行われた。

(1)事業総括シンポジウム「古事記学の成果・課題・展望」の開催(遠隔)

- (2)成果刊行物『古事記学』第七号、『古事記学事業報告書』などの刊行
 (3)定例研究会のオンライン開催
 (4)『古事記』絵画コンテストの開催

二、事業の目的と概要

さて、本研究事業の目的は、上記した「古事記学」の推進拠点形成」事業の成果を踏まえつつ、本学の研究教育活動の根幹ともいえる「古典」研究をより一層拡充し、もつて「神道と日本文化」の先端的かつ世界的な研究を展開するための基盤を整備することにある。そして、このような先端的・世界的な「古典」研究を、令和の新たな「国学」、すなわち國學院大學発の総合的人文学として位置づけ、広く社会へ発信することで、本学の建学の精神のより強固な具現化を目指す、単年度の研究事業である。

そもそも、平成十九年に設立された研究開発推進機構では、研究開発推進センターを中心に、各学内共同利用研究機関において、建学の精神に関わる多彩な研究プロジェクトが推進されてきた。これを受けて本研究事業では、それら研究開発推進機構における「神道」や「国学」に關係する多彩な研究プロジェクトを「古典」研究の下に包括し、本学の学術資産及び研究蓄積を十二分に活用しつつ、「古典」を対象として、本学の独自性溢れる「神道と日本文化」の総合的研究を展開し、その成果を国内外へ広く発信することにある。

三、本年度の事業計画

以上の目的を達成するために次の三つの研究を柱とし、研究事業を推進する。

①「古典」の文献学的研究を基軸とする学際的研究
 ②近世・近代国学者の学説史・ネットワークの再検討による国学の総合的研究
 ③古典の総合的研究成果の社会的還元・発信に関する挑戦的研究

①は「古事記学」事業の成果を活用・発展させることを目的とするもので、「古事記学」事業によって構築された方法を『古事記』だけでなく、『万葉集』をはじめとする「古典」に援用し、國學院の諸学問を結集した学際的な研究を「古典学」として展開する。具体的には、『古事記』の本文校訂・訓読・註釈について、定例研究会を年6回ほど開催し、検討を加える。また『万葉集』についても文献学を基軸とする学際的検討を進める。それとともに学内所蔵の古典籍の調査・検討を行うとともに、古典に関する研究文献を蒐集し、目録を作成する。これらの成果は古事記学において作成した「古事記研究総合データベース」を母体として構築する予定のデータベースに活用する。

②は近世・近代国学者の「古典」

研究に関する研究を発掘、あるいは再検討していくとともに、その人的・知的ネットワークの再検証を行う。また、学内所蔵の国学関連資料の調査・整理も行う。特に令和二年度に寄託された東羽倉家資料の整理を進め、研究環境を整備する。さらに、本学に寄贈された国学者関連資料として、井上家文書の整理や今泉定助関係資料の整理・公開についての体制を構築する。併せて、これまで日本文化研究所や本学が蒐集してきた国学者の著作について再調査を進め、今後の研究を推進していくために必要な学外資料等のリストアップを行う。

③は、①及び②の研究成果を踏まえた上で、「古典」研究を結節点とする学内横断による研究教育連携体制を構築するとともに、「古典」の魅力や価値を広く世界へ発信し、文化的資源としての「古典」を社会で活用する方法を模索する。とりわけ、子ども向け「古典」教材の開発や「古典」を中核とする伝統文化及び地域社会などに関する研究などを通じて本学の各学部・機関との連携体制を構築し、加えて学外の研究機関との連携を模索し、本学の研究環境を整備する。

以上の研究を組織横断的かつ有機的に展開することで、國學院大學の建学の精神を具現化し、「古典学」の学府として本学の特色を一層、確固なものとするべく事業を推進していく予定である。

(文責・渡邊 卓)

國學院大學博物館 令和三年度事業計画

一、事業の目的

國學院大學博物館は、建学の精神に基づいた日本文化に関する学術資料を広く調査研究、収集、分類、保管、展示するとともに、学術研究の成果公開・発信を行い、もって研究教育の支援及び社会貢献に資することを目的とし、(I) 展示公開、(II) 教育普及、(III) 環境整備・営繕、(IV) 運営支援の四つを軸に事業を推進する。

本年度は、前年度までに実施してきた博物館の基盤強化のための施策(展示の再構成、多言語化、ミュージアムショップの運営、環境整備)を継続するとともに、二十一世紀研究教育計画(第四次・戦略一)に示された「学術資産の活用」「社会貢献・地域連携の強化」を推進し、評価指標達成を目指す。

二、本年度事業の概要

(I) 展示公開

本学の学術資産を活用し、研究成果を本学学生・社会に対して公開するため、次の展示を行う。

(1) 常設展示

a. 三つの展示室(考古、神道、校史)において、主に研究開発推進機構内の各機関と協働しつつ実施する。

b. 定期的な、展示替えを行う。

c. 展示構成、解説などについて

て、継続的に改善、変更を行う。

(2) 特別展・企画展

本学の学術資産、研究成果、学術的・組織的ネットワークを活かしたテーマ性を有する展示を計画・実施する。

(3) 特集展示等

前述した特別展・企画展と同様の目的と役割を担う小規模な展示を、各展示室や博物館ホールで実施する。

(II) 教育普及

研究開発推進機構を含め、本学の研究成果を本学学生のみならず、広く社会に対しても公開し、もって社会貢献・地域連携の強化を行うため、各展示に関連したイベント(オンライン含む)を実施する。

(III) 環境整備・営繕

空気質・温湿度について、正常な状態を維持するための運用を日常的に行い、更に総合的有害生物管理(IPM)を実施し、外部借用資料を含め、展示・保管資料の保護を行う。また、新型コロナウイルス対策として、施設内の衛生環境を整備・維持する。

(IV) 運営支援

博物館の情報ページやSNS等で随時公開する。更に、ミュージアムショップや配送でも、展示図録や本学の研究成果に関係

する書籍、ミュージアムグッズなどを販売することにより、展示への興味を深めてもらい、利用者の満足度やリピーター率の向上を図る。以上の施策による情報発信、評価や口コミにより、来館者数や認知度の増進などを狙う。

三、実施計画

(I) 展示公開

(1) 常設展示

a. 展示替えを行う。

b. 展示解説の部分的な変更を行う。

(2) 特別展・企画展

本年度の特別展・企画展は次の通り(※は国指定品借用を伴う)。

a. 特別列品「神の新たな物語―熊野と八幡の縁起―」

b. 企画展「ホワッツ神道―神道入門―」

c. 特別展「『日本書紀』撰録1300年―神と人とを結ぶ書物―」※

d. 企画展「アイヌ―日本列島における先住民族の遺産―」

e. 企画展「都の神やしろとまつり 世界遺産 賀茂別雷(上賀茂)神社の至宝」※

(3) 特集展示等

特集展示・季節の展示等を各展示室で実施する。

(II) 教育普及

特別展・企画展毎に、展示解説やミュージアムトーク等の動画コンテンツを制作。オンラインミュージアムとして配信し、博物館利用層の拡大を目指す。

(III) 環境整備・営繕

博物館内(展示室や収蔵庫など)

における温湿度維持のための測定評価と、文化財害虫等の侵入や被害を防ぐための総合的有害生物管理(IPM)を行う。また、日本博物館協会等の関連ガイドラインに基づき、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を継続。利用者の安全・社会的距離を常に確保し、館内設備の消毒も日常的に実施する。

(IV) 運営支援

ホームページ・SNSによる情報発信を推進し、また、来館者情報の分析を通して運営の改善を行う。更に英語による展示解説の充実と発信、各方面への広報活動、ミュージアムショップでの図録や本学・博物館関連商品の販売(配送含む)などを行う。

令和二年度は、四月の緊急事態宣言に伴う臨時休館を経て、短縮開館の形で再開。

本年度は、引き続き短縮開館の態勢を当面継続する。緊急事態宣言下においては、学生等を主対象とした開館とするなど、コロナ対策を徹底したうえで柔軟に対応する。

本年度の特別展・企画展は、コロナ禍により前年度の開催を断念したものが半数を占める。依然としてコロナ終息の目途が立たず大きな影響を受けるなか、感染対策を講じた実展示に加え、オンライン等を活用し、来館希望者の多様な事情に応じた形で積極的に発信を続けていく。

(文責・國學院大學博物館)

彙報

会議

○全体

- ・令和三年度第一回運営委員会、令和三年五月六日(木)、若木タワー地下一階会議室○二(オンライン対応あり)
- ・令和三年度第一回企画委員会、令和三年四月二十一日(水)、オンライン会議
- ・令和三年度第一回人事委員会、令和三年四月二十八日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和三年度第一回教員等資格審査委員会、令和三年四月二十八日(水)、AMC棟五階会議室○六

○日本文化研究所

- ・令和三年度第一回所員会議、令和三年四月十四日(水)、オンライン会議

○学術資料センター

- ・令和三年度第一回学術資料センター会議、令和三年四月二十八日(水)、オンライン会議

○研究開発推進センター

- ・令和三年度第一回研究開発推進センター会議、令和三年四月七日(水)、オンライン会議

○國學院大學博物館

- ・令和三年度第一回國學院大學博物館会議、令和三年四月二十八日(水)、オンライン会議

刊行物

○全体

- ・研究開発推進機構「機構ニュース」通号二十八(令和三年二月二十五日発行)
- ・研究開発推進機構「國學院大學研究開発推進機構紀要」第十三号(令和三年三月三十一日発行)

○日本文化研究所

- ・日本文化研究所「日本文化研究所年報」十三号(令和二年九月三十日発行)
- ・日本文化研究所「国際研究フォーラム」21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書(令和三年二月二十八日発行)
- ・日本文化研究所「第13回学生宗教意識調査報告書」(令和三年二月二十八日発行)
- ・日本文化研究所「Kokugakujin Japan Studies」no.2(令和三年二月)

○学術資料センター

- ・学術資料センター(神道資料館部 門)「古代の祭りといー疫病・災害・崇り」(令和三年二月二十六日発行)
- ・学術資料センター(考古学資料館

部門)「中世和鏡の基礎的研究 分析編二」(令和三年二月二十八日発行)

○校史・学術資産研究センター

- ・校史・学術資産研究センター「國學院大學 校史・学術資産研究」第十三号(令和三年三月五日発行)
- ・校史・学術資産研究センター「國學院の古文書」(令和三年三月三十一日発行)
- ・校史・学術資産研究センター「校史」第三十一号(令和三年三月一日発行)

○研究開発推進センター

- ・研究開発推進センター「國學院大學研究開発推進センター研究紀要」第十五号(令和三年三月十日発行)
- ・研究開発推進センター「別冊ブックレット 渋谷学」(令和三年二月二十八日発行)

○國學院大學博物館

- ・國學院大學博物館「國學院大學博物館研究報告」第三十七輯(令和二年二月二十八日発行)

○古事記学センター

- ・古事記学センター「古事記学」第七号(令和三年三月十日発行)
- ・古事記学センター「古事記学」の推進拠点形成ー世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的研究・教育・発信ー古事記学事業報告

書(令和三年三月三十一日発行)

令和3年度 國學院大學 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧 (事業別)

◇新規研究事業

* 研究事業代表者

令和3年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員	
日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信 (R1～3年度)	星野靖二 吉永博彰	* 黒崎浩行 シッケタンツ, エリック 平藤喜久子 藤澤 紫	丹羽宣子	高田 彩 藤井修平 宮澤安紀	大場あや	井上順孝 櫻井義秀 土屋 博 ナカイ, ケイト ヘイヴンズ, ノルマン 山中 弘	天田顕徳 今井信治 小高絢子 伊藤大介 カド, イヴ 塚田穂高	野口生也 フレール, カール 牧野元紀 村上 晶 矢崎早枝子
	◇「國學院大學国学研究プラットフォーム」の成果公開とデータベース再構築 (R3年度)	武田幸也	* 遠藤 潤 松本久史		間芝志保 古畑侑亮	木村悠之介	林 淳	井関大介 一戸 今井功一 小田真裕	小平美香 岸口真結子 齋藤公太 荻原雄斗 三ツ松誠
学術資料センター	博物館収蔵品の資料化とデジタル公開に関する研究 (R2～4年度)	池田榮史 深澤太郎	* 内川隆志 小川直之 大日方一郎 黒崎浩行 笹生 衛 谷口康浩 吉田敏弘	阿部常樹 菊地大樹 鳥越多工摩	川嶋麗華	松本耕作		荒井祐介 石井 匠 石川岳彦 伊藤大祐 植田 真香 奥山 香平 尾上 周平 加藤元康 北澤宏明	栗木 崇 黒田迪子 惟村忠志 齋藤しおり 大工原豊 田口哲也 野藤 妙 平本謙一郎 山口 晃
	神道関連資料の整理分析と神道史の再検討 (R2～4年度)	大東敬明 吉永博彰	* 加瀬直弥 笹生 衛 鈴木聡子		木村大樹		岡田莊司	水谷 類	
校史・学術資産研究センター	國學院大學における自校史研究とアーカイブの活用 (R2～4年度)	渡邊 卓 大東敬明 比企貴之	* 齊藤智朗 藤田大誠		大番彩香	齊藤みのり			
	◇國學院大學における学術資産研究の体制整備 (R3年度)	渡邊 卓 大東敬明	* 加瀬直弥 齊藤智朗 野中哲照 藤田大誠 矢部健太郎	高見澤美紀	高橋俊之		根岸茂夫	遠藤珠紀 金子 拓	
研究開発推進センター	研究開発推進センター研究事業	宮本誉士 大東敬明 渡邊 卓 武田幸也 半田竜介	* 遠藤 潤 太田直之 加瀬直弥 菅 浩二 西岡和彦 藤田大誠 藤本頼生 松本久史	小山田江津子 神杉靖嗣		大貫大樹	古沢広祐	網谷哲成 河村忠伸 黒岩昭彦 康 成文 小林威朗 坂井久能 佐藤一伯 重村光輝 大丸真美 高原光啓 津田 勉	東郷茂彦 戸浪裕之 中野裕三 西俣先平 野田安平 冬月 律 宮澤佳廣 森 悟朗 吉田希子 裕
	◇渋谷の歴史・民俗・宗教に関する研究 (R3年度)	宮本誉士 武田幸也 半田竜介	* 松本久史	秋野淳一	伊藤新之輔		上山和雄	今泉 宜子 高久 舞	吉田律人
	◇神道と日本文化の創造的「古典学」—令和の新しき国学研究—基盤整備事業 (R3年度)	渡邊 卓 武田幸也	* 荒木優也 上野 誠 大石泰夫	* 谷口雅博 土佐秀里	小野諒巳 キロス, イグナシオ 曹 咏梅	鶴橋辰成	鈴木健多郎	辰巳正明	
研究開発推進センター	◇「地域マネジメント研究センター」設置準備事業 (R3年度)	石垣 悟 石本東生 石山千代 梅川智也 楓 千里 嵩 和雄 金 今善 児玉千絵 小林 裕 椎原晶子 下村彰男 清野 隆 大門 創 仲野潤一 南雲勝志 藤岡麻理子 堀木美告 松本貴文 米田誠司	* 西村幸夫						
	國學院大學博物館	池田榮史 大東敬明 深澤太郎 渡邊 卓 吉永博彰	* 内川隆志 笹生 衛	田中 潤		楠恵美子	朱 岩石 小林達雄 福山林繼 福尾正彦 古谷 毅 三橋 健 茂木雅博 柳田康雄	粕谷 崇 中村 耕 中村耕作	阿部 啓一 安高啓明 山本哲也

令和3年度 國學院大學 研究開発推進機構 人事一覽

機構長	笹生 衛										
日本文化研究所長	平藤喜久子										
学術資料センター長	内川隆志										
校史・学術資産研究センター長	齊藤智朗										
研究開発推進センター長	松本久史										
國學院大學博物館長	笹生 衛										
國學院大學博物館副館長	内川隆志 及川 聡										
専任教員	教授	池田榮史 宮本誉士	石本東生 米田誠司	梅川智也	楓 千里	小林 稔	椎原晶子	下村彰男	星野靖二	堀木美告	
	教授(特別専任)	南雲勝志									
	准教授	石垣 悟 松本貴文	石山千代 渡邊 卓	嵩 和雄	金 今善	清野 隆	大東敬明	大門 創	深澤太郎	藤岡麻理子	
	講師	仲野潤一									
	助教	児玉千絵 武田幸也 吉永博彰									
	助教(特別専任)	半田竜介 比企貴之									
兼任教員	教授	上野 誠 笹生 衛 藤澤 紫	内川隆志 菅 浩二 藤田大誠	遠藤 潤 谷口雅博 松本久史	大石泰夫 谷口康浩 矢部健太郎	太田直之 土佐秀里 吉田敏弘	小川直之 西岡和彦	加瀬直弥 西村幸夫	黒崎浩行 野中哲照	齊藤智朗 平藤喜久子	
	准教授	藤本頼生									
	助教	荒木優也 シッケタンツ, エリック 鈴木聡子									
	助手	大日方一郎									
研究員	客員研究員	秋野淳一 高見澤美紀	阿部常樹 田中 潤	小野諒巳 鳥越多工摩	小山田江津子 丹羽宣子	神杉靖嗣	菊地大樹	キロス, イグナシオ	曹 咏梅		
	ポストク研究員	伊藤新之輔 古畑侑亮	鶴橋辰成 宮澤安紀	大番彩香	川嶋麗華	木村大樹	高田 彩	高橋俊之	問芝志保 藤井修平		
	研究補助員	大貫大樹 大場あや 木村悠之介 楠 恵美子 齊藤みのり 鈴木健多郎 松本耕作									
客員教授	井上順孝 上山和雄 岡田莊司 小林達雄 櫻井義秀 朱 岩石 梶山林繼 辰巳正明 土屋 博 ナカイ, ケイト 根岸茂夫 林 淳 福尾正彦 古沢広祐 古谷 毅 ヘイヴンズ, ノルマン 三橋 健 茂木雅博 柳田康雄 山中 弘										
	天田顕徳 網谷哲成 荒井裕介 石井 匠 石川岳彦 井関大介 一戸 渉 伊藤大祐 今井功一 今井信治 今泉宜子 植田 真 遠藤珠紀 荻原 稔 奥山 香 小田真裕 小平美香 小高純子 尾上周平 ガイタニディス, ヤニス 粕谷 崇 加藤元康 カド-, イヴ 金子 拓 河村忠伸 北澤宏明 栗木 崇 黒岩昭彦 黒田迪子 康 成文 小林威朗 惟村忠志 齋藤公太 齋藤しおり 坂井久能 佐藤一伯 重村光輝 芹口真結子 大工原豊 大丸真美 高原光啓 高久 舞 田口哲也 塚田徳高 津田 勉 東郷茂彦 戸浪裕之 中野裕三 中村 大 中村耕作 西俣先子 野口生也 野田安平 野藤 妙 バウシュ, イローナ 原田雄斗 ビュッテル, ジャン=ミシェル 平本謙一郎 冬月 律 フレレ, カール 牧野元紀 水谷 類 三ツ松誠 宮澤佳廣 村上 晶 森 悟朗 矢崎早枝子 安高啓明 山口 晃 山本哲也 吉田扶希子 吉田律人 吉野 裕										

令和3年度 事務局人事

学術メディアセンター事務部長	及川 聡
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構・図書館担当部長	山口輝幸
学術メディアセンター事務部情報システム担当部長	堀内弘行
学術メディアセンター事務部情報システム担当次長	後藤幸雄
学術メディアセンター事務部情報システム課長	川畑敏之
学術メディアセンター事務部図書館担当次長	澤井 隆
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課長	飯塚陽子
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課	中條 豊 添谷昌稔 小平浩衣 相川由起 宮本千夏子 三塚広椰
國學院大學博物館担当	志水志保 三島 隆
國學院大學博物館学芸員	佐々木理良 尾上周平 網谷哲成(兼務)

追悼

COEプログラム申請前後のことば

松本久史

阪本是丸先生の訃報に接し、いったい何を書くべきなのか、途方に暮れ、ただ、ただ、とりとめもない思ひ出話を呟くほかに術はない。

平成十四年の六月、阪本先生から、私と、現在神社本庁にいらつしやる浅山雅司氏が、常磐松の大学院棟の一階に突然呼び出され、二人で、訳も分からずに、今はなき「更科」の出前蕎麦を食べさせられた。

厄介な仕事を頼むが、お前たちやるか、との問いに、こちらも訳もわからずに承諾したことが、わたしに



平成15年6月 COE国学研究会

とつてのCOEに関わる発端であった。

「トップ30」のネーミングで情報は先行しており、いよいよ国も大学を選別する時代になったのだなど感じてはいた。当時は、大学自体が大型の競争的資金にチャレンジした経験がほとんどなく、ノウハウも全くない手探り状況からスタートしなければならなかった。あからさまな弱肉強食原理の中、國學院は生き残れるのか、という問いが目前に突き付けられたのである。

そして、作成された「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」研究事業計画。このネーミングに阪本先生の思いが凝縮されていたといつてよい。日本文化の総合的・国際的な研究発信、という漠然としたイメージをどう具体化していくのか。このタイトルだけでも何日間も議論が交わされた。そこで先生は本学の持つ二つの特徴に注目された。一つは「神道」であり、もう一つは「国学」であった。

「神道」に関しては、本学が初めての自己点検・評価の認証を受けるにあたり、作成の中心にあった先生は、建学の精神である「神道精神」を「主体性を保持した寛容の精神」と新たに現代的な解釈をされた。また、拠点リーダーをお願いした考古学の小林達雄先生が企画した、大英

博物館の「SHINTO」展にもインスパイアされるところが大きかった。縄文から現代までの人文学を「神道」が貫く、という研究方針の軸が成立したのである。

さらに、「国学的」という言葉も、単純に國學院だからではなく、先生の国学に対する造詣と愛着が込められていたのである。人文学を総合する学問として、あえて「学際」や「国際」でなく、「国学的」という言葉を選んだことが、まさに國學院のCOEを際立たせることになったのである。

ここで、当時の阿部美哉学長の強力な個性とリーダーシップがあつたことも忘れられない。阿部先生は申請に当たって「阪本さん、不戦敗はいけませんよ」ときつく仰られたそうである。阿部先生の不退転の意思と支えがなければ、申請にすら辿り着けなかったのではあるまいか。それに応える阪本先生の「意地」のぶつかり合いを直に感じたものである。また、宇梶理事長以下の大学事務局の方々も我々の申請作業をサポートしてくれた。まさに全学的な体制で臨み、採択を勝ち取ったのであった。

ここは推測にはなるが、COEプログラムとは、阪本先生の脳裡にあった「あるべき日本文化研究所」の姿ではなかったか。常々先生は助手・助教授として研究に従事した日本文化研究所での出来事を、生き生きとわれわれに話されていた。研究者としての青春を、先生は日本文化研究所で過ごされたのであろう。異なる研究分野のスペシャリストた

ちが談論風発、時には激しい議論を交わす。そんなイメージが投影されていたに違いないと私は強く確信するのである。

COEプログラムに次いで、オーブン・リサーチ・センター整備事業に申請、採択され、渋谷キャンパス再開発事業の一環としてのAMC棟が建てられ、研究組織として研究開発推進機構が成立したが、その企画・立案の中心にいたのも、やはり阪本先生であった。

平成十四年一月に構想された、「國學院大學二十一世紀研究教育計画」のうち、神道文化学部の開設、COEプログラム、さらにORC事業による渋谷キャンパス整備といった大きな柱を先生は成し遂げられた。阪本先生は、國學院大學、そして研究開発推進機構の進むべき方向を示され、実践されたのである。今こそ、機構の各構成員は改めて思いを致すべきであろう。

COE採択後、後期授業が始まる一週間前、COE担当教員の飲み会にて、これも、今はなき「高松」であったが、「定宿」としていた青木周平先生などもいらつしやつた中で、私がうどんを食べているとき、また、阪本先生から呼び出され、いきなり「来週から授業やれよな」とご自身の「近代神道史」の代講を私が担当することとなった。これも、訳も分からず、有無を言わさず、であった。とりとめもない、思ひ出話である。

追悼

阪本是丸先生と校史・学術資産研究センター

齊藤智朗

阪本是丸先生が帰幽された。先生から公私にわたり多大なる御恩情を賜った者として、数々の思い出とともに先生への感謝の念は尽きない。ここでは校史・学術資産研究センターに纏わる先生の御事績を思い返すことで、追悼の言葉に代えさせていただきます。

校史・学術資産研究センターは平成十九年の研究開発推進機構の発足に際して設置された。先生は本センター設置の中心人物にして、初代センター長に就任された。本センター設置の理由について後日人づてに聞いたところでは、「建学の精神を護るために」と先生が主唱されたのだという。本センターは「校史」を組織的な研究事業の中核に据える本学特有の研究機関であり、先生がいらしたからこそ設置が実現したと言える。

私は本センターを主たる配属先とし、先生のもとで主に組織運営の業務に携わった。しかし、新設の機関ゆえ草創期の運営をめぐっては軋轢やトラブルも多く、私は自力での事態收拾に努めたものの、結局は先生に解決していただく始末であった。『國學院大學百三十周年記念誌』を編纂した時分も、当時先生は怪我をされ御自宅で療養中にもかかわらず、お伺いをして相談に乗っていただくなど、常に御迷惑をお掛けした。

先生には何事においても「謙虚」であるべきだと幾度も諭された。研究では常に史資料と真摯に向き合う姿勢を教示され、研究発表は真剣勝負の場であると指導された。業務の面でも、実務に慣れて本センターの実績が上がり、私自身得意になった時には、先生から「仕事なんだからやらなきゃいけないし、できて当たり前なんだよ」と戒められた。

本センター設置の頃から先生は國學院の人物と学問に関する御業績をこれまで以上に発表されるようになった。御定年に際しても折口信夫を中心に近現代における本学の代表的な研究者たちの人的つながりや思想・学問に関する講演をされた。『國學院雑誌』での最後の御寄稿となつてしまった「談話室」の随想(「國學院雑誌に纏はる断」)においては、青木周平先生との想い出を顧みながら「國學院の学問」を研究することの重要性を説かれて

いる。先生は建学の精神の護持と「國學院の学問」に関する研究のさらなる発展を本センターに期待されていたように思う。図らずも本年度よりセンター長に就任した身として、先生が抱かれたであろう想いを継承していくことで、御学恩に少しでも報いるところがあればと願う次第である。

追悼

阪本是丸先生と研究開発推進センター

宮本啓士

初代の研究開発推進機構長、研究開発推進センター長を務められた、阪本是丸先生が、去る令和三年四月十八日に逝去された。

本学、そして本機構にとって、先生は、かけがえのない存在であった。先生のご厚情には、感謝してもしきれないものがある。先生との思い出は数限りないが、研究開発推進センターにおいてご指導頂いた日々のことが最も深く鮮明な記憶として残っている。

先生は、研究開発推進センターが発足した平成十八年三月から令和二年三月に至るまで、センター長を務められた。時には厳しく、時には優しく、親身に指導される先生であった。本センターのことを常に考え、気に掛けられていた先生の姿が昨日のこのように思い出される。先生は、構成員とともに、事業構想や組織運営、研究に関する内容について、夜遅くまで時間を費やされることも多かった。

また、本センターの事業について、常に合理的に、そして大局的な観点から判断される一方で、本学、神社界など、関係者への配慮を優先し、自らのことは後回しにした情の人であった。そして、「原点を忘れないこと」、「感謝して生きること」を何より大切にされた先生であった。

本機構、本センターに残された足跡は、枚挙に暇ないが、文部科学省

21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の研究事務に従事したCOE事務局の構成員により、本センターを設置したこと、本機構を発足させるための原動力となつて活躍されたことは、特に銘記すべき点であろう。COE事業を継承・発展させる拠点形成を目指して、本機構は設置されたのであり、その原点なくして現在はありません。

また、本センターにおいて実施した、「建学の精神」に基づく国学的手法による神道・日本文化、国学に関する数々の研究も、「國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業」としての共存学、渋谷学、古事記学なども、いずれも先生のご尽力あつた研究事業であった。さらに、本センターにおいて申請業務を行なった、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業、私立大学研究ブランディング事業などの採択も、先生のご尽力なしにはあり得ないものであった。

先生は、これらの研究事業を通して、本機構設立の理念を終始実践し、「建学の精神」に基づく研究事業を継承・発展させるべく、その拠点形成に邁進された方であった。その先生の想いを受け継ぐこと、業務遂行に専心することをここに誓い、追悼の言葉とした。



2008年10月、AMC竣工記念

追悼
「是丸さん」は厳しく、そして情厚く

井上 順孝

阪本是丸氏はよく「これまるさん」と呼ばれていた。彼の突然の訃報に接し、生前の姿を思い起こすとき、阪本氏や阪本教授では、私にとっては幾分よそよそしくなってしまう。「是丸さん」と綴らせてもらいたい。

是丸さんと親しく接するようになったのは、私が一九八二年に日本文化研究所に着任してからである。ほぼ四〇年前になる。学術メディアセンター（AMC）の敷地の一角にあったが、今はもう影も形もない常磐松二号館の六階で、よく研究上の話を交わすようになった。明治期の政教関係、明治神道史について、これほど緻密に研究している人がいるのかと、驚嘆に近い思いを抱いた。

二人とも三十代半ば、身軽に動ける頃であった。重厚な研究が重ねられていた日本文化研究所であるが、もっと成果を広く社会に発信しようという点で意見が一致した。是丸さんは「明治期の神祇行政に関する研究」という専任プロジェクトの責任者になった。私は同じく「宗教行政と神道教派に関する研究」プロジェクトの責任者になった。二つのプロジェクトで共同研究を実施しようということになった。その成果は是丸さんとの共編で刊行した『日本型政教関係の誕生』（第一書房、一九八七年）で公にできた。

大学院生にも加わってもらい、参加者が自由に意見を交換できた共同研究であった。是丸さんも、あの頃が一番研究ができて楽しかったと、後年よく懐かしげに回顧していた。是丸さんは一九八八年に文学部神道学科に移り、いささか寂しくもあったが、その後も兼任教員として日本文化研究所のプロジェクトにはずっと関わってもらった。

「日本文化を知る講座」も二人で相談して提起し、新しい企画として一九九〇年秋に始まった。第一回は是丸さんは四人の講師のうちの一人となった。テーマは「明治期における日本文化の激変―文明開化は日本人の生活文化にどのような影響を与えたのか」であった。太陽暦採択の影響、新しい祝祭日、神仏分離、祭礼の変化と、ポイントは見事に押さえられていた。

春秋の講演会を同じテーマで二年間続け、さらにまとめのシンポジウムを実施したうえで、それを一冊の本として刊行しようという案も

二人で相談した。その第一冊目が『近代化と宗教ブーム』（同朋舎出版、一九九〇年）である。二冊目の『近代天皇制と宗教的権威』（同前、一九九二年）では是丸さんは本領を發揮した。

その後も『神道事典』（弘文堂、一九九四年）の編集と一緒に苦労したが、寄せられた各項目の原稿に目を通す作業をしている時、驚かされたことがある。一人の執筆者の原稿内容について、その人の既出の論文とほとんど同じ内容で、これは問題ではないかと言っているのである。調べたところ、執筆者にはその旨を伝え、書き直してもらった。その項目は是丸さんの専門分野とは遠いところであったが、そこまでチェックするという姿勢に、あらためて学問に対する厳しい態度を見せつけられる思いがした。

二〇〇二年には文学部神道学科が、新設の神道文化学部へと改組された。その後は是丸さんが最も心血を注いだのは、同年採択され五年間実施された21世紀COEプログラム（の事業であった。「神道と日本文化の学的研究発信の拠点形成」というユニークなテーマは、是丸さんの発案と聞く。

研究開発推進機構の設立には、このCOEプログラム事業が直接的に関わっている。日本文化研究所を研究開発推進機構へと大きく改編していくストーリーの組み立ては、是丸さんなしにはできなかったであろう。常磐松一号館、二号館、三号館があった場所にAMCを建てるといった構想は、思い切ったものであった。是丸さんはいろいろな部署の要求を聞いた上で、調整を図っていった。そうした配慮は抜群であった。

AMCは実は六階建てで、六階は現在の機構事務課の上にあるこじんまりとした部屋である。そこは当初機構長室であった。けれども是丸さんはそこを使うことはなかった。どう見てもそのような場所としてふさわしい場所ではなかったから、当然である。

AMC竣工記念にDVDを作成することにした。いつも公開シンポジウムを撮影してもらっていた業者に作製を依頼した。AMC全体の紹介のほか、機構長や各機関長の短いインタビューも収めた。だが機構長であった是丸さんは、撮影に乗り気でなかった。そこで二人だけになり、私がビデオカメラで撮ることで承諾してもらった。場所はそれまで使わずにいまであった機構長室にした。ややはにかみながらも、機構についての思いを語ってくれた。学問的には厳しかったが、情にはすこぶる厚い人であった。



1984年、日本文化研究所の研修旅行で熱唱。三峯神社



1983年1月、日本文化研究所主催の国際シンポジウム懇親会